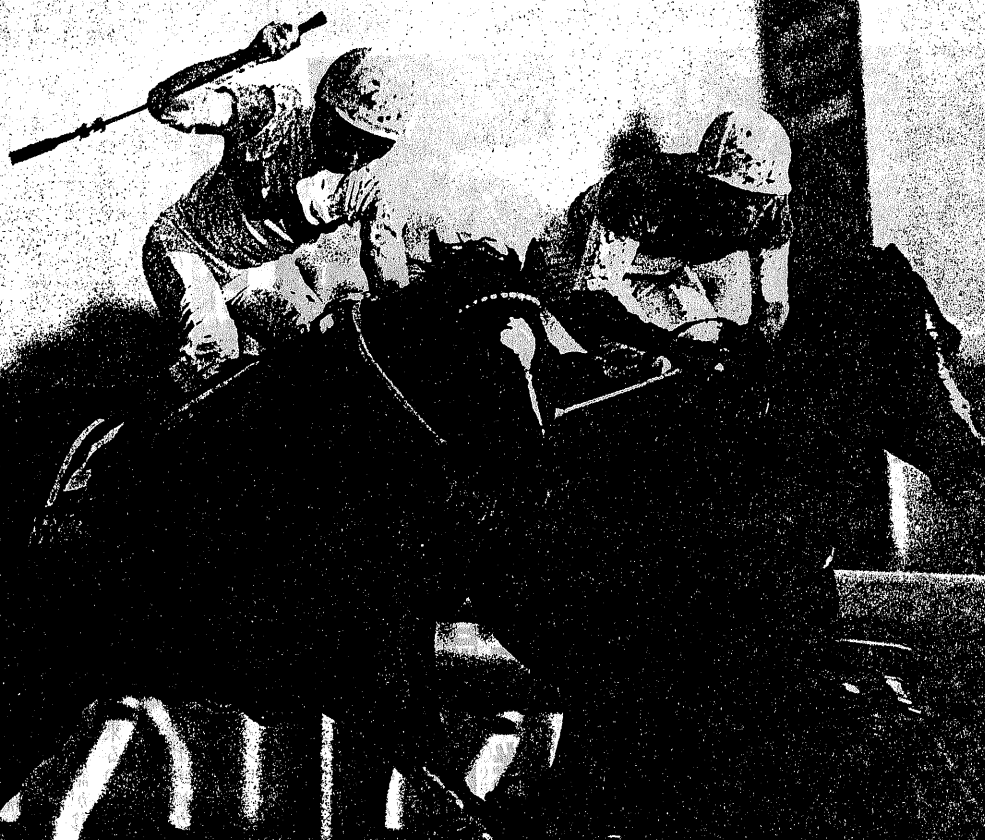


'92年度フリーハンデ決定

1992年のフリーハンデは、本部、美浦、栗東の9人のハンデキヤッパーが討議の末、4歳、5歳以上、短距離、3歳の4部門が別表のように決定した。



ミホノブルボンは高い評価で65^{キロ}
古馬は
ジャパンカップ優勝を評価して
トウカイテイオーに65^{キロ}

(ハンデキヤッパー)

●本部

●甲佐勇

●美浦トレトレーニング・センター

●朝日眞道、今泉俊彰、小林善一郎、井上真

●栗東トレーニング・センター

●滝澤勇、西田研、山田隆雄、尾関道春

フリーハンデとは

通常のレースのハンデキャップは、出走馬の実績、調子などさまざまな観点から負担重量を決定し、出走馬の“実力”を均等のものとしてレースを争わせようとするものです。これに対して、フリーハンデは、その年度の競走馬の“格付け”をするものです。この“格付け”は単にその年度の各馬の実力比較にとどまらず、歴年の名馬の実力比較ともなります。ヨーロッパでは長いフリーハンデの歴史があり、年齢別のハンデだけでなく、距離別の全ヨーロッパのハンデがつくられています。これは生産界への指標ともなるもので、重要な意義をもっています。

★4歳

ライスシャワーは61キ

92年の4歳馬はいまでもなくミホノブルボンが主役だった。ダービーが終わった時点でメンバーに恵まれていたという声も聞かれたが、秋になって改めて強さを認識させられた。それだけに4歳馬の力を知る上でも、ジャパンCと有馬記念に出走できなかったのは残念なことである。また、外国産馬のヒシマサルと驕馬のレガシーワールドの活躍も忘れることができない。

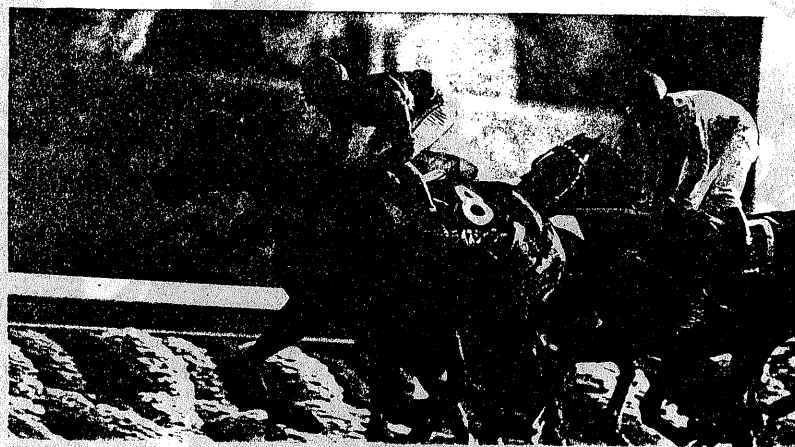
さて、トップハンデはミホノブルボンであることは誰もが認めるところだが、65、64、で意見は分かれた。

後続に影をも踏ませない強さで皐月賞とダービーを圧勝、菊花賞も負けたとはいえ強い内容だった。過去に65、64、を与えられた三冠馬ミスターシービー、88年のオグリキャップ、91年のトウカイテイオーらと同等の評価ができるという65、64、という馬との対戦がないこと、オグリキャップと並べるには無理があるという異論を唱える64、派。ミホノブルボンを破ったライスシャワーが有馬記念で惨敗したのもミホノブルボンにせめてはマイナスという指摘もあった。しかし、同じ三冠馬のミホシサンやサクラスタオー(ともに64、)らと比べるとミホノブルボンが上というのは64、派も認めるところだ。最終的にはオグリキャップやトウカイテイオーとの比較は難しいが、少なくともミホシサン、サクラスタオーよりも上であるという意見が、大勢を占めて65、に落ち着いた。

ミホノブルボンに続く2番手グループの3頭、ライスシャワー、レガシーワールド、ヒシマサルはどういう序列で並べるかで意見が交わされた。ライスシャワ

ーは菊花賞優勝とダービー2着の実績。レガシーワールドは重賞勝ちがセントライト記念のみだが、ジャパンC4着、有馬記念2着というG1級に近い成績を残している。ヒシマサルは春に重賞3連勝している。

まずヒシマサルに関しては秋になってドンカスターS、ジャパンC、有馬記念とすべてのレースでレガシーワールドに先着を許したことから3番手ということで見解が一致した。問題はライスシャワーとレガシーワールドの評価だ。ライスシャワーにしてもレガシーワールドとの



菊花賞(1着ライスシャワー)

直接対決では2戦して2敗している。しかし、ジャパンCと有馬記念の好走を認めつつも重賞勝ちがセントライト記念の一つだけでは、菊花賞のタイトルに及ばないということではライスシャワーを上置き、置くと決まった。ただ、タイトル重視だと、出走するレースに限られる驕馬には不利になるという意見があったことも付け加えておく。古馬G1戦線で驕馬が出走できないのは天皇賞だけ。レガシーワールドには93年の活躍を期待したいところだ。

次に何にするかに話が移った。ここでも60、の大会に乗るのはライスシャワーとレガシーワールドの2頭ということで見解は一致した。まずレガシーワールドについては61、という説が出た。しかし61、というのはメジロマックインやスパークリークなどとうとうする顔ぶれが揃っておりそこまではどうかという声が大勢を占めた。また、ライスシャワーについても菊花賞を勝ちダービー2着

牝馬のレベルは高く、77年に勝るとも劣らない。

それに比べると牝馬の層は厚く、同時に全体のレベルも高かった。レベルの高さはサンエイサンキュウの札幌記念、タケノベルベットの鳴尾記念、ニシノフラワーのスプリングSの結果から言われているが、すでに桜花賞の時点で兆候は現れていた。例年だと収得賞金800万円クラスが桜花賞出走可能なラインとなるが、92年は880万のオグリホワイトさえも除外されている。92年組はインターグロリア、リニアクインの77年組に勝るとも劣らないというのが一致した意見だった。が、その序列に関しては激論が交わされた。

最初にニシノフラワーとシンコウラブ

という同じ実績ながら91年のレオダーバンより上に評価したいという意見も出たが、有馬記念の惨敗がマイナス材料となった。結局、ライスシャワー61、レガシーワールド60、ヒシマサル59、という評価で落ち着いた。

これらに続く馬ではマヤノペトリュース、ナリタタイセイ、マチカネタンホイザ、アサカリジェントが組上に乗せられたが、いずれにしても前記の4頭とは2、以上の差があることで見解は一致した。ここではマヤノペトリュースがダービー3着、ナリタタイセイが皐月賞2着の実績から57、とした。アサカリジェントも弥生賞の完勝と皐月賞3着から57、という意見も出たが、菊花賞3着のマチカネタンホイザと同列の56、となった。

今年の4歳牡馬陣の特徴は、マヤノペトリュースやアサカリジェントが秋に出走できなかったこともあるが、上位4頭が抜けた存在となり、それに続く層が薄かったことである。

ライの2頭については、総合評価と距離での評価を完全に区別したらどうかという提案が出された。しかし88年のサツカーボーイを例にとると、マイルチャンピオンシップを勝ったことでクラシックの実績がなくても総合で62、という高いハンデがつけられており、総合の評価では短距離部門を切り離さないことに決まった。そうすると桜花賞とスプリングSをともに強い内容で勝ったニシノフラワーが一番手となる。牝馬三冠のメジロラモース(62、)や準三冠のマックスビユーティ(61、)にも及ばないものの、桜花賞を勝ちオークス2着した91年のシスターウシヨウ(59、)よりは幅広い活躍



エリザベス女王杯(1歳タケノベルベット)

をしたということと60に決まった。
問題はアドラーブル、タケノベルベ
ト、シンコウラブリイの3番手グル
ブだった。桜花賞2着、オークス優勝、
エリザベス女王杯4着という実績を高く
評価してアドラーブルを1位とする派。
エリザベス女王杯でオークス馬と桜花賞
馬を相手に圧勝、さらにそのあと古馬相
手の鳴尾記念も完勝したこととタケノベ
ルベットを1位とする派。休養明けのカ
ーネーションCを除けば、負けたのはダ
イタクヘリオスの2着となったマイルチ
ャンピオンシップだけ、そのマイルチャ
ンピオンシップの2着にしても高く評価
できるといってシンコウラブリイを
上位とする派。完全に見解は二つに分か
れたが、議論が進むとともにG1ホース
のアドラーブルとタケノベルベットの2
頭を上位にすることに傾きつつあった。

'92年フリーハンデ 4 歳

65	ミホノブルボン
61	ライシシャワー
60	※ニシノフラワー
59	レガシーワールド
	※アドラーブル
	※外シンコウラブリイ
	※タケノベルベット
57	外ヒシマサル
	※父ササンエイヤンキュー
	父ナリタタイセイ
	マヤノペトリュース
56	アサカリジェント
	※父エルカーサリバー
	マチカネタンホイザ
55	キョウエイボーガン
	※父キョウワホウセキ
	市スタントマン
54	※メジロカムリ
	父アイルトンシンボリ
	アラシ
53	父エアジョーダン
	外エービージェット
	※チェリーコウマン
	※ティスコホール
	メイキングデシオ
	ヤマニンミラクル
	※父ワンモアラブウエイ
52	※イエローブルーム
	※父カガミセンカ
	父ゴールデンセウス
	父サクラセカイオー
	父セキテイリキウオー
	ダイイチジョイフル
	ノーザンコンダクト
	※外ファンタジースズカ
	※ブランドアート
	※ヤマニンドリマー
	※ラックムゲン
	マーメイドタバン

(以上39頭)

※牝馬 父父内国産馬 血抽せん馬 地公営出身馬 市市場取引馬 外外国産馬

★5歳以上

メジロマックイーンは、 '91年と同じ63キ。

メジロマックイーンとトウカイテイ
オーという二大スターホースが中心となっ
てハイレベルの激戦が期待された'92年の
古馬戦線だが、春の天皇賞後にメジロマ
ックイーンが故障休養、トウカイテイオ
ーにしてもジャパンCを勝ったとはいえ
一年を通じてコンスタントに活躍できな
かったことから、いささか寂しいものに
終始した。また、古馬の中心勢力となる
5歳馬の低調ぶりも目についた。G1ウ
イナーとなったのは安田記念のヤマニン
ゼファールとジャパンCのトウカイテイオ

ーの2頭だけで、春秋の天皇賞、マイル
チャンピオンシップ、有馬記念では連対
さえ果たせなかった。
さて今年の焦点となるのはジャパンC
を勝ったトウカイテイオーの評価であ
る。春の天皇賞を勝ったメジロマックイ
ーン、宝塚記念と有馬記念を勝ったメジ
ロパーマーについては例年を参考にでき
るが、トウカイテイオーはジャパンC以
外のG1レースを惨敗したことと評価を
難しくさせている。まず、ジャパンCを
最大限に評価してその他のレースは目を

つぶつてもいいのではないかという意見
がでた。しかし、トウカイテイオーだけ
に限って、負けたレースが調子が悪かっ
たからといって甘い評価はできないとい
う厳しい反論も返された。
いずれにしてもジャパンCが国際G1
に認定されたことと、国内と海外とのバ
ランスを同時に考えなければならぬとい
うのは一致した見解だった。そこで、
ジャパンCに出走できなかったメジロマ
ックイーンとメジロパーマーのハンデを
まず最初に検討することとなった。
メジロマックイーンは春の天皇賞と阪
神大賞典を勝ち2戦2勝。天皇賞の勝ち
っぷりから昨年と変わらないという評価
で、昨年と同じ63キが与えられた。
メジロパーマーは宝塚記念と有馬記念
の2つのG1レースと新潟大賞典を勝ち
7戦3勝。メジロマックイーンと並べら
れるのが争点となった。宝塚記念は、阪
神競馬場が先行馬有利なレースが多かつ
たので展開に恵まれたという感じもある
が、有馬記念の残り1200mから11秒
台のラップを刻んで後続を一気に引き離
した内容は強かったし、G12勝した過
去の馬をみると高い評価を与えられてお
り、メジロマックイーンと並べてもおか
しくないという意見が出された。反面、
63キというのはオグリキャップやスーパ

ークリークといった馬に与えられる超A級の証であり、メジロパーマーをここまで評価することはできないという意見も。結局、昨年の有馬記念馬ダイウサク(61)より1上が妥当な評価ということと62に決まった。

以上、2頭のフリーハンデが決定したことで、改めてトウカイテイオーの評価が論じられた。

「今年のジャパンCは2頭の英ダービー馬を筆頭に欧州の年度代表馬、オーストラリアの年度代表馬とダービー馬らが顔を揃えて過去最高のメンバーとなった。それらを相手にして勝ったトウカイテイオーは相当な評価ができるのではないかな」

「いや、ジャパンCは回を重ねることに形がみえてきた。欧州のA級馬といえども日本の馬場に合わない馬もいることがわかってきた。ジャパンCをメンバーだけで評価するのは危険だ。今回外国招待馬で実力を十分に発揮したのはナチュラリズムとデアードクターだけである」しかし、これまでジャパンCに2回優勝しているオセアニア地区の馬を破っている事実も見逃せない」

議論はジャパンCそのものの評価にまで及んだが、クラシックディスタンス(2400m)で行われるジャパンCは天皇賞より重視するべきで、メジロマック



天皇賞・春(メジロマックイーン)

'92年フリーハンデ 5歳以上

65	父トウカイテイオー
63	父メジロマックイーン
62	父メジロパーマー
60	父ダイタクヘリオス
	レッツゴークターキン
59	父カミノクレッセ
	父メジロライアン
58	オースミロッチ
	ナイスネイチャ
57	※⑩イクノディクタス
	イブキマイカグラ
	④ダイナマイトダディ
	ミスターズベイン
	ムービースター
56	⑧ヤマニングローバル
	④カリブソング
	④トウショウフアルコウ
	※⑩エボトウショウ
55	⑧ホワイトアロー
	④フジヤマケンザン
54	④ミスターシクレノン
	※スカーレットブーケ
	ナリタハヤブサ
	④メイショウビトリ
	ラシアンゴールド
	レットイットビー
	⑩ワイドバトル
53	④シャコグレイド
	※ジャニス
	ニホンピロフレイブ
	④⑩ホクセイシプレー
	④マルマツエース
	マンジュデンカブト
52	④ゴールデンアワー
	タニノボレロ
	※④ヒガシマジヨルカ
	⑩ミナミノアカリ
	④メイショウハブオー
	※④⑩ユセイフェアリー
	リーゼンシュラク

(以上40頭)

イーオンより上に置くというのが出席者の一致した見解であった。では、何に、何にするかとなる。ジャパンCを評価しつつ、4歳時にみせた迫力がなく、他のレースで惨敗したこと、64、という意見が出たが、大勢は65に傾きつつあった。

①ミスターシービーは秋の天皇賞勝ちだけで64が与えられたが、それよりも上であること、②タマモクロスやオグリキャップなどの日本馬がジャパンCで競り負けていたのに対して、トウカイテイオーは競り勝ったこと、③ジャパンCが古馬ナンバー1のレースであること、という3点が決め手となり、長時間に渡る議論もトウカイテイオー65でようやくピリオドが打たれた。

他に60の大台に乗ったのがレッツゴ

ーターキンとダイタクヘリオスの2頭。レッツゴーターキンは天皇賞(秋)というタイトルがものをいった。ダイタクヘリオスはマイルチャンピオンシップとマイルC、毎日王冠のGII2勝。昨年とは高松宮杯(GII)と毎日王冠が入り替わっただけである。昨年と同じ59という意見も出たが、毎日王冠のレコード勝ちが高く評価された。

春の天皇賞、安田記念、宝塚記念の3レースで2着となったカミノクレッセも60という意見が出たが、GIホースのレッツゴーターキン、ダイタクヘリオスらと並べるのは無理があるということで59に落ち着いた。日経賞を勝ったメジロライアンにも59が与えられた。

58には京都記念、京都大賞典のGII2勝のオースミロッチ、勝ち鞍をないものの秋のGI戦線での好走が評価されてナイスネイチャの2頭がランクされた。

57にはムービースター(秋の天皇賞2着)、ヤマニングローバル(秋の天皇賞3着)、イブキマイカグラ(春の天皇賞3着)、ミスターズベイン(高松宮杯)、ダイナマイトダディ(中山記念)の5頭がランクされた。

牝馬の最高はイクノディクタスの57。オルカマーのレコード勝ちと毎日王冠の2着が評価された。

以下の馬については別表を参照していただきたい。

★短距離

ダイタクヘリオスは、 '91年度と同じ62キ。

'92年の短距離部門はニシノフラワー、シンコウラブリイの4歳牝馬が活躍したことが特色である。また、トップクラスは別にして2番手グループになるとマイラーとスプリンターのカラーが強くて、年でもあった。ユウキトップランやディ

クターガールなどはまったくのスプリンターである。そこでまず昨年と同様の活躍を見せたダイタクヘリオスの62キを基準にすると、いうことで、ダイタクヘリオスのハンデが最初に検討された。昨年以上位にランク



されたダイイチルビー、ケイエスマラクル、バンブーメモリーが抜けて層の薄さは否めないが、マイルチャンピオンシップの圧勝は自分の競馬をしたときの強さを改めて知らしめた。しかしいずれにしても、決定的な下げる材料にも上げる材料にもならないので、昨年と同じ62で決まった。

続いて安田記念で芝での初勝利も飾ったヤマニンゼファアの評価に移った。マイルチャンピオンシップは期待外れに終わったが、2着に惜敗したスプリンターズSで内を突いて一気に抜け出した脚は見事ということで、ダイタクヘリオスより1.5下の61が与えられた。ヤマニンゼファアのベスト距離は1200mが最もいい。

今年の短距離部門での一番の焦点はニシノフラワーをどう評価するかだろう。桜花賞での圧勝、スプリンターズSでみ

'92年フリーハンデ 短 距 離

62	※ダイタクヘリオス
61	※ニシノフラワー
	※ヤマニンゼファア
59	※外シニコウラブリイ
58	※ダイナマイトダディ
57	ナルシスノワール
56	ユウキトップラン
55	※ディクターガール
	※トシグリーン
	※マイスーパーマン
54	※サクラバクシンオー
	※スカーレットブーケ
	※バンブーパッション
	※市ホクセイシプレー
53	※シンホリスキー
	※スプライトパッサー
	ニホンピロラック
	※ハギノスイセイ
	ハッピーギネス
52	※エイシンウイザード
	※エリザベスローズ
	※サムソクイーン
	※チャンネルフォー
	地トモエリージェント

(以上24頭)

せた差し脚は十分すぎるほどアビールするものがあつた。総合では60がつけられており、短距離適性を加味すれば総合より上回るといふことで61に決まった。これはセックスアローウンスや馬齢重量の斤量差を考慮するとダイタクヘリオスより高い評価となる。

以上GIホース3頭に続くのがシニコウラブリイ、ダイナマイトダディ、ナルシスノワールである。

シニコウラブリイの1600m以下での成績はニュージランドトロフィーを勝ち、マイルチャンピオンシップが2着、マイルチャンピオンシップでの内容は評価しつつも、必ずしも短距離のエキスパ

ートではないということと総合と同じ59で落ち着いた。

ダイナマイトダディは、好メンバーが揃った京王杯スプリングC勝ちが評価されて58にランクされた。期待が大きかっただけに、故障で秋のマイル路線に出走できなかったのが惜しまれる。

スプリンターズS3着のナルシスノワールは東京新聞杯勝ちを考慮に入れて昨年より1.5上の57となった。

56にはCBC賞のユウキトップランがランクされた。

なお、以下の馬については別表を参照していただきたい。

ろうか。坂路やウッドチップコースなどが完成してハード面で関西と肩を並べても、ソフト面での差は簡単に縮まるものではないというのが出席者の一致した見解であつた。しかしことオープン馬の質に限れば、中には、GI戦線で活躍を期待できる馬が現れることもありうるという意見もあった。いずれにしても3歳競馬が同様の傾向である限り、東西格差の是正は困難であらう。

昨年はトップの56にランクしたミホノブルボンとニシノフラワーがそれぞれ3歳に続いて4歳の牡馬と牝馬のチャンピオンとなった。これは非常に稀なケースである。なお、3歳馬のフリーハンデは4歳になったの期待も加味される。

今年は朝日杯3歳Sで1、2着したエ

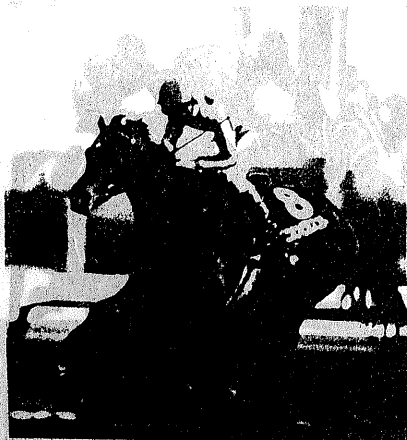
★3歳

東西格差は顕著に出た。 ビワハヤヒデ、エルウエー ウインを55キ。

今年は関東馬が4重賞を制して昨年の全敗から盛り返したが、全体的にみれば東西の格差は一向に変わっていない。むしろさらにひろがっているという声も聞かれた。オープン馬を比較すると昨年が

関東1に対して関西2、今年は関東1に対して関西3という比率にまでなっている。新馬勝ちの馬をみても7割以上が関西馬という事実もある。

それでは西高東低はいつまで続くのだ



3 歳(東)

(計35頭)



関西馬が67頭。昨年は関東馬40頭、関西馬60頭でさらに格差が広がったようである。同じ日本で東も西もないという意見もあるが、全体のレベルアップは切磋琢磨してこそ。関東勢の奮起を期待したい。

朝日杯3歳S(1着エルウェーウィン)